

1920～2010年代 所蔵工芸品に見る 未来へつづく美生活展 (続報) コラボレーション企画の詳細発表！！

会場の一部では、オリジナルデザインのテキスタイルが特徴的な服飾ブランド、ミナ ペルホネンのテキスタイルと当館所蔵作品を並べて展示し、両者を見比べてご覧いただけるコーナーを設けます。テキスタイルのデザインと呼応する作品を、デザイナーの皆川明氏にセレクトしていただき、ファブリックボードと併せてご紹介します。



(左から)
ルーシー・リー 《白釉ニット文鉢》1984年頃
ミナ ペルホネン 《hello !》2010年



(左から)
前大峰 《沈金蝶散模様色紙箱》(蓋表) 1959年
ミナ ペルホネン 《sky flower》2012年

展覧会によせて、皆川明氏にコメントをいただきました。

工藝というものは、作家の個人的な暮らしや社会背景から生まれる物への哲学、創造、技と、人間が過去から積み重ねた文明、文化が融合した美の産物のように思える。作家は、自身の生命の持ち時間内に習得し得る美意識を、自らの暮らしから獲得し、技を鍛錬し、その表現を確固たる独自性に昇華させ、表現に値する材料を用い、叡智によって造形へと変換している。込められる技と意識は、秘めた労とそこに至るまでの時間と共に、物の生命力として光を放つ。それらは時代背景の中から造作される動機を持ちながらも時代を超越した美を保ち続ける。その永続的な物の生命力こそ、人間が古代から道具や物を作るという行為に魅了され続けている根源的な理由なのではないだろうか。その様に工藝が内に永遠の美を宿すものである事をいつまでも大切に思い、時の流れの中で美と生活への探求を喜びとして持ち続けることを、現代の暮らしにおいて大切に繋いでいきたい。

(左から)

桂盛行《鶉四分一打出水滴》1971年
ミナ ペルホネン《home circle》2009年

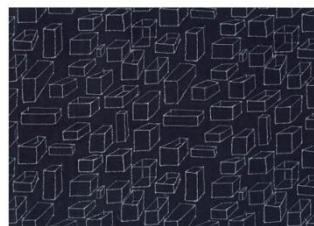
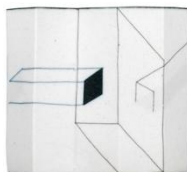


(左から)

増村益城《乾漆朱輪花盤》1983年
ミナ ペルホネン《hanaco》2008年

(左から)

ボディル・マンツ
《アンギュラー・フォーム、“キューブ”》(部分)
2004年
ミナ ペルホネン《cube》2009年



「1920～2010年代 所蔵工芸品に見る 未来へつづく美生活展」

会期：2015年12月23日（水・祝）～2016年2月21日（日）
会場：東京国立近代美術館工芸館（東京メトロ東西線「竹橋駅」1b 出口徒歩8分）
開館時間：10：00～17：00（入館は16：30まで）
主催：東京国立近代美術館
観覧料：一般210円 大学生70円

そのほか、休館日など、展覧会についての詳しい情報はHPでご確認ください。
http://www.momat.go.jp/cg/exhibition/longing_for_modernity/

<報道関係の方のお問い合わせ先>

東京国立近代美術館工芸館（展覧会担当 北村、広報担当 高橋）
TEL 03-3211-7781（工芸課直通）E-mail：koge-pr@momat.go.jp

<掲載用のお問い合わせ先>

TEL：03-5777-8600（ハローダイヤル）<http://www.momat.go.jp>（公式HP）